

在日コリアン一世女性の自己形成：シャーマニズム の事例分析から

宮下, 良子
跡見学園女子短期大学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7374725>

出版情報：国際教育文化研究. 5, pp.29-40, 2005-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



在日コリアン一世女性の自己形成 —シャーマニズムの事例分析から—

宮下良子

はじめに

本稿でとりあげる在日コリアン一世の女性Kさんは、1919年生まれで韓国、全羅北道出身である。1942年、23歳の時に4歳になる長女を連れて日本に渡り、日本社会の中で生きていた、いわゆる「移民一世」である。彼女は日本で成巫過程（佐々木、1980:20）を経て、半生をシャーマン⁽¹⁾的職能者として生きてきた。Kさんは面と向かっては「ポサル（菩薩）」「先生」と在日コリアンたちには尊称されるが、裏では「チョムジェンイ（占い師）」と呼称されている。そのようなシャーマンたちは1980年代前半の大阪では、約40～50人と推定され（宗教社会学の会編、1985:249）、Kさんもその一人である。韓国においてはムーダン⁽²⁾とチョムジェンイの区別は、クッ（巫儀）を司祭できるか否かという機能面にあるとされているが（依田、1986:410）、在日コリアン社会においては、チョムジェンイによりクッが執り行われていた。移民社会においては、本国とは異なる適応を試みなければならなかったであろう。本稿では職能者の機能に多様性はあるものの、神霊との直接交流をする能力を持つ点を考慮して、彼らを「シャーマン」と称する。

Kさんは、1970年頃から大阪のS市を拠点とした日本人社会においてこの巫儀を施していった。つまり、在日コリアンのクライアントから日本人クライアントへ移行していく過程で、Kさんの施す巫儀の方法は少しずつ変容していき、日本人社会の中で在日コリアンのシャーマニズムが機能していたのである。その発端はOさんという日本人女性に巫儀を施したことがきっかけであり、その後口コミで自営業者のクライアントに広がっていったのである⁽³⁾。

本国において教育を受けることが出来ず、日本においても非識字者として生きてきたKさんが、シャーマニズムという切り札を通して、頼ってくるクライアントたちに何かしらの処方を与える。それに救済の道を見つけた者たちとKさんの関係の中で、クライアント側はどのようにしてKさんと親密な関係を構築していったのか。そして、そのプロセスの中でKさんのアイデンティティはどのように形成されていったのかを考察することが本稿の目的である。

研究の方法としては、Kさんが施した巫儀の語りに基づいてクライアントにインタビューし、そこで語られるクライアントの語りを再びKさんの語りに照合させるという繰り返しの作業の中から分析し、考察する。

一. 在日コリアンのシャーマニズムに関する先行研究

従来の韓国シャーマニズムの先行研究では、韓国伝統社会の儒教的価値観に属する「祖先祭祀（チェサ）」と、超自然的存在を認め父系の祖先以外の死者祭祀も補完するものとして巫俗（ムソク）^{（4）}があるという秋葉隆の考え方が大きな影響力をもってきた（秋葉 1954:137、ジャネリ、任 1993:244）。しかし、これは、いわゆる大伝統と小伝統の相互補完とも言い換えられるが、後者に当たる巫俗は迷信視され蔑視され下級文化に位置付けられてきた（飯田、2002a:45）。その後、セマウル運動で否定されるが復活し、最近ではムーダンが「人間国宝」になるなど、朝鮮民族の国民文化とされるような動きもある。一方、在日コリアンのシャーマニズムについては、宗教社会学者たちが「民俗宗教」として実態調査した韓国寺（宗教社会学の会編、1985）やそれを基盤に「在日コリアンの諸宗教は、在日社会全体の文化的・社会的統合といった機能をもたず、むしろ宗教ごとに分節化した集団や階層を抱え、それぞれ異なる価値志向に対応しあるいはそれを創出している」と在日コリアンの宗教と社会に発展させた論考（飯田、2002a）がある。これらの先行研究は都市のエスニック・グループを母体とするシャーマニズムは、そのグループのエスニシティを再活性化させると共に日本人の諸宗教とも交渉を持ちながら展開してきたとしている。在日のシャーマニズム研究にあたっては、こうした変質、読み替え、再創造に注目していかなければならない。

本稿はこのようなエスニシティ論を再考し、在日コリアンのシャーマニズムが日本の諸宗教と混淆しながら、日本社会において再創造されていく過程を考察するという点でこれらの先行研究と一線を画する。本研究の意義は、Kさんがシャーマニズムを媒介として、日本人の友人を得たことをきっかけに、在日コリアン・グループから日本人社会へと活動範囲を拡大していったことへの注目であり、Kさんを取り巻く日常実践の中から「民俗」や「宗教」を考え直すという視点にある。そしてそれが、従来の在日コリアンのエスニシティ研究において、一石を投ずるものになるのではないかと考える。

二. Kさんのライフ・ヒストリー

在日コリアン一世のKさんは1919年に韓国全羅北道で生まれ、18歳の時に漁師だった最初の夫と結婚する。しかし、長女が生まれて間もなくその夫は漁に出掛けたまま遭難し、途方に暮れたKさんは当時馬車引きをしていた男性と知り合い、1939年頃長女を連れて旧満州に渡る。そこでの約2年間に、その男性との間に女の子をもうけるが、KさんたちはKさんの母親の訃報を知り、再び全羅北道に戻る。しかし、その帰郷によって、一緒に暮らしていた男性には妻がいたことが判明した。その男性と本妻との間には子どもがなかったために、Kさんは無理やり本妻からその男性との間にもうけた女の子を奪われてしまい、その男性とも会えなくなってしまう。その後1942年、Kさんが23歳の時に当時4歳になる長女を連れて日本に渡る。最初に到着した港は山口県の下関で、その後すぐに北九州の若松に居住する。それから終戦を迎え、1947年までに下関から北九州市内を転々とする。「日本が負けて終戦になった時、周りの日本

人は皆泣いとした。うちは朝鮮人やけど、なんか涙が出てきてな…」とKさんは当時を振り返る。しかし、そんな感傷よりも、幼子を抱えて今日の糧をどうするかということに必死だったという。そんなKさんが「巫病」⁽⁵⁾というものを体験したのは、下関に住んでいた1943年である。その当時には6歳になっていたKさんの長女はその時の母親の現象を「飛んで跳ねていた」と語っている。そんな時に在日コリアン一世の男性、朴さん⁽⁶⁾というシャーマン（スンニム＝僧任⁽⁷⁾）に出会い、彼からKさんの亡くなった母親と妹（幼くして病死した）が彼女に憑依しているということを告げられる。それからのKさんは約1年にわたり、巫儀（クッ）の依頼がある度に京都の住居から九州に来る朴さんに同行し、手伝い賃として多少の報酬をもらったという。現在大阪の大東市に住む、80歳近い在日コリアン一世の女性Aさんは、当時のことを「あの頃まだうち若くて下関のな、トンクルトンネ（糞の村）⁽⁸⁾に住んでたんや。ある日な、Kさんが朴さんとうちらのトンネ（村）に〈拝み〉にきたんや。それからの付き合いや、Kさんとは」と述懐する。貧困のどん底生活の中でKさんは神霊との出会いの体験を重ねていったのであろう。

1947年、長女が9歳の時に在日コリアンの男性と再婚をし、福岡県I市に居住することとなり、その夫との間に長男と次女をもうける。その間夫の反対にあい、内にこもった霊力を抑制し続けた。しかし、夫の話によると時々、「チュムをしてくる」と言ったきり、何日も帰って来ない時があったという。チュムとは、韓国語では「踊り」の意味だが、在日コリアン社会では「巫儀そのものの行為」を指している。例えば崔は、「韓国巫俗の踊りにも、シベリア・シャマニズムのそれに見られるのと同様、ムダンが神格へと転換する機能が含まれている」（崔、1994:128）と述べているが、これは韓国巫俗にとっての「踊り」の重要性についての見解である。つまり、巫俗には絶対不可欠なものとして「踊り」の機能があり、その意味から「踊り（チュム）」＝「巫儀そのものの行為」と在日コリアンの人々には解釈されているのではないかと考える。その当時のKさんは生巫（ソン・ムダン＝未熟なムダン）（秋葉、1950）であり、巫儀を執り行う立場にはなかったが、「どこかで巫儀が行われるというのを聞くと、どうしても我慢出来なくなって出掛けて行った」とKさんは言う。つまり、その場に居合わせることで巫儀に関わりたいという内的欲求を満たそうとしたのではないかと推測する。

しかしその再婚も破綻し、1961年に協議離婚し、次女だけを連れて、当時結婚した長女が住んでいた大阪の西成区へと1963年に移り住んだ。翌年、知人の紹介で在日コリアンの男性Rさんと一緒になり5歳になる次女を連れて大阪S市に定住することとなる（1964年）。ある日大阪生野区鶴橋のコリアン・マーケットで知り合った在日コリアン一世のシャーマンの女性Hさんが、かつて下関で出会った朴さんと組んで巫儀をしているということを知った。Hさんは1903年頃に生まれ、いつ日本に来て、どういう経緯でシャーマンになったのか、また本名も不明だが、JR環状線の鶴橋駅近くに居住していたことから、Kさんの娘たちに「鶴橋のハンメ（おばあちゃん）」と呼ばれるようになった。そのハンメから信貴山の韓国寺、修法寺⁽⁹⁾に朴さんが住んでいるということを聞き、早々にKさんは朴さんを訪ねた。仕事を得るためである。一緒になったRさんは実際には定職を持たず、主にチュンシネビ⁽¹⁰⁾を生業としており、暮らしは貧しかった。「字も知らんで生活力もないうちは、小さい子を抱えて生きていくために

朴さんのメンバーに入った」と、Kさんは当時を振り返り述懐する。1965年頃から、朴さん、ハンメ、Kさんの3人で巫儀（クッ）を行うようになっていくが、巫儀の教授方法は基本的には口承であった。先輩シャーマンから教授され、または模倣して後輩シャーマンたちはその技術を習得していくのである。彼らのクライアントは在日コリアンで、どこかのコミュニティでチェソククッ（祈福祭）、ピョンクッ（治病祭）、シッキムクッ（死霊祭）などを行うと評判になり、なかなか家には帰れなかった。それが、1970年頃から大阪S市の日本人クライアントOさんに巫儀を施したことがきっかけで、少しずつ日本人クライアントを獲得していったのである。

三．巫儀を中心としたシャーマンとクライアントの語り

Kさんは1964年に大阪S市Y町に住み始めてから、1988年当時に長女が住んでいた大阪吹田市に転居するまでの25年間に、日本人クライアントを獲得し、同時に親交を深めていったのだが、どのような巫儀が行われ、またどのように親密度が増していったのかを、以下のそれぞれの語りから考察する。

1 Sさんの事例から

（巫儀1）仏壇に魂を入れる

クライアント《S》の語り——Sさんは1927年生まれの77歳で、名古屋市生まれである。八人兄弟の四男で、そのうちの母親違いの兄一人がY家へ養子に出されたという事情があった。その後兄はT家の婿養子となるが、戦争末期に疎開した先の家を出火で失う。家族の命は助かったが婚家の義母の仏壇だけが残ったという状況であったらしい。そんな兄に仏壇を守るような余裕はなく、兄の生家であるSさんの実家へ仏壇（位牌は兄が預かる）を預けることとなった。その後Sさんの兄たちは次々に戦死または病死をし、実家の仏壇と共にT家の仏壇もSさんが預かったということである。

Sさんは終戦後、1946年～1950年まで名古屋で職工として働き、1951年から大阪、福島 of 衣料製造卸しの店に住み込みで入った。その店は「メリヤスの粗断ち（あらだち）」といって、反物を身ごろ、袖等に裁断し、それを縫製工場で縫ってもらい、地方の卸し屋（主に西日本）に売るといふ商いをしていた。当時のSさんは、丁稚奉公で入った周りの年少者たちよりも年長で仕事もできたので、1954年には独立して、大阪S市の市場で衣料品小売業店（下着や靴下、パジャマ、洋服等）を営む事となった。Kさんは1964年頃から、その店の買い物客であったが、その頃Sさんは殆ど従業員に店を任せていたので、Kさんがシャーマンであることを知ったのは1971年ぐらいである。「怖い夢や奇想天外な夢を見て、何か気持ちが落ち着かない」とKさんに打ち明け、とにかく彼女を家に招待した。すると彼女は仏壇の位牌がないことを指摘し、早急に位牌を作ることを指示した。その後位牌ができてから、その《仏壇に魂を入れる》お経（チョムアン＝點眼）を唱えながらSさんに、「今から伝えるホトケの言うことをよく聞きなさい」と言ったそうである。そして「私を守ってくれている人は全くの他人だ。それなの

に大事にしてくれてとてもあり難い。これからはS家の生活を保証する」と、ホトケがKさんにのり移ってそう言った、とSさんはいう。

シャーマン《K》の語り——さまよっているホトケの魂をきちんとあるべき所に納めなければ、家人に何らかの形で良くないことが起きてしまう。うちが呼び出した「カミ」がホトケと交信して、うちの口からホトケの言葉を発する。でもその時うち自身の意識はない、とKさんはいう。Kさんは亡くなったKさんの母の霊を「カミ」と呼び、同じく亡くなった妹の霊を「巫女」と呼んでいる。Kさんの場合、この両者がKさんにのり移って予言、託宣、ト占などの行為をさせているのだという。

SさんがKさんと知り合う前、Sさんは店を一人の従業員に任せていた。ところが、その従業員との仲がうまくいかず、従業員はKさんにそのことを相談していた（1971年）。そこでKさんが二人の間に入り、両者の話を聞いていくうちに、従業員の方が誤解しているということが分かった。SさんはKさんによって誤解が解けたと同時に、自分という人間性を理解してもらえたということがうれしかったと筆者に語った。つまり、SさんがKさんに巫儀を依頼するという背景には、自分のことが理解されたという満足感が基本にあり、そのことがKさんへの親近感につながったということがある。換言すれば、シャーマンとクライアントという関係以前に少なからず、意志の疎通があったのである。

（巫儀2）巳さんの霊を鎮める

クライアント《S》の語り——現在のS市の家に転居したのは1937年である。庭に80センチ四方、高さ30センチの石垣があり、その中央に30センチ四方の穴と、側面に5センチくらいの三角形の穴がある。近所の人に聞くと《巳さん》だろうということだった。そこでKさんに相談したら、「《巳さん》の祟りは怖いから、お社（やしろ）を建てないといけない」と言われたそうである。早々にSさんは祠（ほくら）を買い、その中に皿を供えた（供え物は生卵）。そしてKさんに《巳さん》を祭り、霊を鎮めてもらう巫儀を執り行ってもらった。その巫儀は夕方から翌朝まで及んだ。お経（地神経）の中で聞き取れたのは、「——善良で純朴なこの男を助けて下さい」という言葉だったという。その1ヵ月後の正月にSさん家族が居間でランプをしていた時、息子のカバンに石油ストーブの火が移り、ボヤを出してしまった。するとその数日後Sさんの店にKさんが来て、「火を出しただろう」と詰問したという。その時Sさんは、誰も知らないはずの出来事を言い当てた事に、Kさんの靈感の強さを疑うことなく信じたという。

シャーマン《K》の語り——家で毎朝のお勤めをしていると巫女（妹の霊）がKさんの耳元で、「Sさんの家から火が出た」と教えてくれたという。それで慌ててSさんの店へ行った。すると案の定、事実だった。いくら拝んだって本人も気をつけなければ、カミの力も効かないと注意したということである。

Kさんのお経は全て韓国語だったが、日本人クライアントに巫儀を施すようになってからは

、少しづつ日本語が混じるようになっていった。クライアントに伝えたい内容は努めて日本語にしたとKさんは語った。そしてSさんも韓国語は理解出来なかったけれども、所々の日本語で全体の内容を推し量ったという。つまり、言葉の違いという差異は、シャーマンとクライアントをつないでいる巫儀によって消されてしまっているのである。重要なのは巫儀の内容を理解する事ではなく、相互の信頼関係を築くことなのである。

上記のような巫儀を通して培われていったSさんのKさんへの「信」と同時に、1970年頃から1998年まで（Kさんは1998年に福岡県へ転居する）の20数年間のつきあいの中で、Sさんは以下のようにKさんの人間性にひかれていったという。

「息子が結婚するので土地を購入したんですわ。せやけど、どうもその土地がいわくのある土地で、買うのをやめようとしたら、仲介業者に幾らかとられたんです。そのことをKさんに言うたら、たまたま知ってる韓国の人ということで、掛け合ってくれたんです。『それでなくても“朝鮮人は悪い”と言われることが多いのに、そんなやり方をしたら、なお言われるやないか』と相手に説教したらしいんです。その後その仲介業者はお金を返してくれました。他の人がKさんのことをあれこれと噂しても、私は別に気になりませんでしたよ。はっきり何でも言うけど、私はそういうところ、好感を持ってました」

「悩み事の多い人は世の中にたくさんいます。そんな人たちを次々にKさんの所に連れて行くと、怒りはるんですわ。『世間には色んな人がおって、良い占いが出たら喜ぶけど、悪い占いが出たら喜ばん人もいる。そんならあんたが悪く言われる』って。ほんまに金儲けしようと思うんなら、そんなこと言わないと思いますよ」

「Kさんは〈拝み〉に行った先で、私の店の品物を宣伝してくれはるんです。私にはそんなことおくびにもず、『安くて品物がいいさかい注文があるんや』って言うて、たくさん売ってくれました。そういう、何て言うんかな、気持ちがうれしかったんです」。

Kさんが1988年に長女が住んでいた大阪の吹田市に転居してからも、Sさんは事あるごとにKさんの所に巫儀の依頼に行き、また、仕事のついでに立ち寄ったと言ってはKさんの家を訪れた。友達もいない、見知らぬ土地で暮らす高齢のKさんが心配だったとSさんは言う。Sさんのこれらの語りから考察すると、Kさんに対する意識は巫儀を通して蓄積していった観念の「信」から、いつしか実際の生活の中で培っていったKさんという人間性に対する「信」としてとらえる方向へと移行していった経緯が伺える。S市から吹田市まで車で迎えに行き、気晴らしにとKさんをOさんの家に連れていったり、S市E町の在日コリアン・コミュニティに連れて行ったりした後、またKさんを吹田市まで送り届けるということが約十年間続いた。このことがきっかけで、SさんとE町の在日コリアンたちはそれまで以上に親しくなり、店頭で売られている商品だけでなく、Sさんの自宅に置いてある在庫品まで購入するようになったという。Kさんを介したこのようなトライアングルな関係性は、在日コリアン、日本人という境界

を越えた新たなネットワークをも構築しているのである。

2 Oさんの事例から

(巫儀3)先祖供養

クライアント《O》の語り——Oさんは1991年、78歳くらいの時に亡くなった。生前Oさんと彼女の夫は共に薬剤師であり、大阪S市Y町で薬局を営んでいた。Kさんは巫儀を行うためにはかなりの体力が消耗することから、いつしか彼女の家から近いその薬局の常連になっていた。またKさんの次女とOさんの息子が同学年であり、同じ珠算教室に通っていたという共通点から、KさんとOさんの親密度は増していったようだった。

Oさんの実家はS市の老舗の料亭であり、弟が跡を継いでいたのだが、薬局もその料亭もあまり順調ではなかった。そこでKさんに相談すると、「実家と婚家の先祖への供養が殆どされておらず、放置したままであることに原因がある」ということで、「仏壇を新たに買って《先祖供養》をしなければいけない」とKさんに忠告され、Kさんと二人のシャーマン（朴さんとハンメ）が大掛かりな巫儀をOさんの自宅で行ったという。

シャーマン《K》の語り——先祖供養は最も大事なもののなのに、放ったらかしにされてきた、その先祖の怒りは大きい。その先祖の霊を鎮めるためには供え物（食物と金銭）と先祖の衣服などを一揃え購入して捧げ祈祷する。巫儀が終わると供え物（食物）の一部は切り捨て、先祖の衣服は燃やしてしまうということである。

Oさんに巫儀を施すようになってからしばらくすると、Kさんは京都の専門店へ袈裟の注文をした。在日コリアン信者からの寄付であった。信者にとっては「寄付をする」ことに意味があり、神仏に関わるものであれば、それが太鼓であれ鐘であれ袈裟であれ、構わないのである。Kさんは在日コリアンへの巫儀の時はチマ・チョゴリを着、日本人への巫儀の時はその紫色の袈裟を羽織るという使い分けをし、「何故、袈裟を着るのか」と筆者が尋ねると、Kさんは「Oさんにとっては、チマ・チョゴリよりも袈裟の方が馴染みがあるやろうから」と答えた。それは、KさんとOさんの親密度が増していく過程で、Kさん自身が日本的なものを受け入れた上で韓国の巫儀の手法にこだわらず、日本と韓国の混淆したシャーマニズムの手法を再創造していったということを示しているのである。

(巫儀4)悪霊のお払い

クライアント《O》の語り——息子がお墓参りに行って帰ってきてから、身体全体がだるくて起きてられないという。Kさんに相談すると、「《悪霊》がとりついたのかもしれないので、お払いをする」と言われた。その方法はまじないを唱えながら包丁2本を激しく交差させ、赤とうがらし（小さく刻んだもの）の入った水をその包丁でふりかけていた。そして、息子の髪を少し剃り落とし、なおもお経を唱え続ける。踊っているような跳んでいるような激しい動きを伴うその巫儀は、一種異様な光景だったという。

シャーマン《K》の語り——《悪霊》というのは体調が弱っている時や、優しい人にとりつ

く傾向が多い。もし、体調の変化が《悪霊》の仕業ならお払いで治るはずだけど、そうでなければ違う原因だろうということである。

Kさんの次女とOさんの息子が同学年であったということと、前記の《悪霊》のお払いをする頃には、両家の付き合いもかなり親密になっており、KさんはOさんの息子を「さん」付けではなく名前で呼んでいた。この巫儀を見学していたKさんの次女の話によれば「家族に対するような遠慮のない、しかし、気持ちのこもったお払いをしていた」ということである。そしてKさんはその巫儀に対する報酬は受け取らなかったということだ。

KさんとOさんの巫儀を通した20数年間の交流の中でOさんの夫が亡くなり、KさんはRさんと別れ（その後、1982年死亡）、二人の周辺には様々な変化があった。喧嘩もよくしたが、いつの間にか仲直りしていたという。以下のOさんの語りは、そんな二人の関係性が集約されている。

「何年かかけて、Kさんと西国三十三ヵ所寺参りに行ったんです。バスツアーでした。Kさんは娘さんの七五三の時の着物の帯をほどいて、掛け軸を入れる袋にしてみました。朝5時には用意して、Kさんが私の家に来て、二人でコーヒー飲んで集合場所へ向かうんです。いつも二人一緒でした。Kさんは誰とでも気軽に友達になってたけど、私はダメでした。そういう性格はあかんよって、よう怒られてました」

「Kさんの家で法事があるのが私は楽しみでした。お供えもののナムルが好きでね、いつもお裾分けを待ってました。Kさんは私が作ったおからが好きで、よううちの台所で味見をしてました」

「Kさんの紹介でE町の韓国の人たちが私の店に来るようになりました。お互い何十年もここに住んで、話もしたことなかった人たちです。だんだん仲良くなってKさんを交えて調剤室でお茶を飲んで世間話するようにまでなりました。皆さん、Sさんとこの肌着もKさんの紹介で買ってはるみたいでした」。

Oさんの語りから考察すると、1960年代後半までのKさんは日本人に対して否定的な意見を持っていて、尚且つ同化しようとはしなかった。しかし、1964年からのS市への定住化と共に、1970年頃から日本人がクライアントになっていった過程で、Oさんに勧められて留袖を作ったり、Oさんの作ったおからを喜んで食べたり、袈裟を着て拝んだりするようになっていったのである。つまり、衣、食という日常世界を接点とする習合はベースとなる生活世界の共同構築なのである。さらに、Kさんを介して、1972年頃から在日コリアンたちがSさん、Oさんの商品を購入したり、Kさんを交えてOさんの薬局の調剤室でお茶を飲み談笑するといったトライアングルな関係性は、在日コリアン、日本人という境界を越えた新たなネットワークをも構築しているというのはSさんの場合と同じである。また、在日コリアンのシャーマニズムと日

本のシャーマニズム（民間信仰）の比較においては、クライアントの相談内容やそれに対する処方、多くの点で類似性があるだけでなく、相互の習合により新しいものに作り変えられている。つまり、巫儀に使われる言葉、儀礼、手法は韓国コンテクストであるが、（巫儀1）～（巫儀4）の祭祀対象がホトケ、巳さん（ヘビ）、先祖、悪霊というのは日本のコンテクストであり、本事例の場合、両者が混淆しながら新たなシャーマニズムを創造しているということなのである。

結語

Kさんが1970年頃から巫儀を施すクライアントは日本人であったという事例から、生活世界では在日コリアンと日本人の間には、戦前の皇民化教育、戦後の差別（蔑視）、国民統合のための融和政策という日本政府の対在日コリアン政策があり、境界なき関係を通じて在日コリアンと日本人がそれぞれの文化を共有しながら、新たなシャーマニズムを再創造することで、エスニシティとは無関係に在日コリアンのシャーマニズムが機能しているという事実が実証された。つまり、「オリジナルな母国文化とは別な、あるいはオリジナルな母国文化から派生、発達した移民文化」を背負った三世、四世が『日本人』の部分で日本人に接する」（原尻、1989:141）のに対して、本稿では母国文化を基盤にした、ともすれば、エスニック・アイデンティティを再生産する傾向にあると思われるがちな一世のシャーマンが、日本人と共にそれぞれの文化を共有しながら生活世界を構築しているのである。先述した宗教社会学の会や飯田剛史の先行研究は、都市のエスニック・グループを母体とするシャーマンが、そのグループのエスニシティを再活性化させるという機能をより重視しているが、それは在日のシャーマニズムを在日のみのシャーマニックな言説という自明性のもとに成立させている。エスニック・アイデンティティの「再生産」の主張は、バウンダリーの「強調」であり、特異なエスニック・グループとして在日コリアンが表象される。

本稿で取り上げたKさんの事例のように、在日コリアンであるKさんが、日本人のOさんに勧められて留袖を作ったり、Oさんの作ったおからを喜んで食べたり、袈裟を着て拝んだりするというような、衣、食という日常生活を接点とする習合が示す在日コリアンの民俗の多文化的状況においては、民俗的慣行の「実践」がエスニック・アイデンティティを超越したものを共同で新たに造り上げている。つまり、巫儀に使われる言葉、儀礼、手法は韓国コンテクストであるが、祭祀対象がホトケ、巳さん（ヘビ）、先祖、悪霊というのは日本のコンテクストであり、本事例の場合、両者が混淆しながら新たなシャーマニズムを創造しているのである。従って、本事例は、民族の区別を所与のものとせず、現実の様態を所与のものと受け入れ、バウンダリーの可変性を体現する実践的モデルとして、従来の在日コリアンのエスニシティ論についての再考を促すものである。

註

- (1) 超自然的存在（霊、精霊、死霊など）と直接接触・交流し、この過程で予言、託宣、ト占、治病行為などをはたす人物（佐々木、1980:41）。
- (2) 女巫のムーダン（巫堂）に対して、男巫はパクスー（博士、ト師）と呼ぶ。その他マンシン（万神＝中北部地方）、タンゴル（丹骨＝南部地方）等（崔、1994）。
- (3) 日本人クライアントの殆どは、美容師、衣料品店や食堂経営者、大工などの自営業者であり、その事と巫儀への報酬がある程度高額であるという事に相関関係があると思われる。
- (4) 「韓国のシャーマニズムを広い意味では巫教と呼び、狭い意味では巫俗と呼んでいる。巫教がその歴史的な展開を包括した総体的な概念であるのに対し、巫俗とは、主に現在見受けられる民間信仰の一部を指した概念として用い」られている（柳、1984:169）。
- (5) 「その人が神から選ばれたという兆候」であり、「肉体と精神の分離が可能な、そういう精神の持ち主となるプロセスを象徴するもの」と崔（崔、1994:139）は定義している。
- (6) 朴さんの本名は 朴＝新井 だが、信者達にはボクさんと呼ばれていた。後述する修法寺前住職。
- (7) 谷富男はスンニムについて「賽神（クッ）のなかで、仏に経をあげ、あるいは霊を読経で供養する役目をもつことから、信者や巫女からは『知識・学問のある人』といわれている。…いずれにせよ、巫儀の本質に照らしてみればあくまでボサルが主人公であり、スンニムは賽神を仏教によって権威づけるために添えられている、という印象を拭うことができない。」また、賽神に臨席する僧侶の宗派性には偏りはなく、「真言宗の（免除をもつ）ボサルと天台宗のスンニムとが組んで巫祭をしている、といったようなことがざらにある」（谷、1985:248）と言及している。さらに韓国寺は「韓国仏教が日本仏教と混淆しながら巫俗と共存している、宗教性と体系性の希薄な寺である」と指摘しているが（谷、1985:242）、後述するKさんの日本人クライアントに施す巫儀はまさしくこの混淆性に立脚したものであり、それが日本人クライアントに受容されていくのである。
- (8) トンクルトンネについては以下の島村の記述が詳しい。「〈在日〉の間では、集住地域はトンネと呼ばれる。トンネとは〈朝鮮語〉で集落、まちの意味である。現在の様子からは想像しにくいが、解放直後、バラック時代のトンネの居住環境は劣悪であった。台風で屋根が吹き飛ばされたし、共同便所は五十軒に一つ程度で衛生状態も決してよいものではなかった。中には『トンクルトンネ（糞の村）』という俗称で呼ばれるトンネもあったほどである」（島村、2000:17）。
- (9) 修法寺は近鉄沿線の信貴山口駅から歩いて15分くらいの所に位置する。生駒全域にわたる韓国寺についての地理的特徴としては、いずれも近鉄沿線の密集地帯にあり、「宅地化の限界線よりも山側の谷筋または谷口に設けられて」（飯田、2002a:67）おり、殆どが中腹以上には位置していないということである。

- (10) 結婚仲介人の意味。Rさんは1909年生まれの在日コリアン一世で、日本に来る前は韓国で教員をしていたという。民団（在日本大韓民国民団）S支部の主要メンバーなので在日コリアン社会では顔が広く、縁談の依頼が多かった。しかし、2～3ヶ月に1～2組のカップルが成立するという確率であり、その報酬額も様々だったので、生活費としては不足していた。金銭以外にも物品としてRADOの腕時計など（1960年代当時の価格で15万円くらい）、チュンシネビの欲する物を男女のどちらかが贈り、もう一方が現金を礼金として渡すといった形式もあったようである。最近のチュンシネビについては島村の『〈在日朝鮮人〉の民俗誌』（歴博、2001）770-772頁を参照されたい。

参考文献

- 秋葉隆、1950、『韓国巫俗の現地研究』、養徳社。
1954、『朝鮮民俗誌』、六三書院。
飯田剛史、2002a、『在日コリアンの宗教と祭り』、世界思想社。
2002b、「在日コリアンの宗教—文化創造の過程—」『環』秋号、藤原書店。
佐々木宏幹、1980、『シャーマニズム』、中公新書。
島村恭則、2000、「境界都市の民族誌—下関の〈在日コリアン〉たち—」『歴博』、103。
2001、「〈在日朝鮮人〉の民俗誌」『国立歴史民俗博物館研究報告』、第91集。
ジャンネリ、ロジャー・任敦姫、1993、『祖先祭祀と韓国社会』、第一書房。
宗教社会学の会編、1985、『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』、創元社。
谷豊夫、1985、「Ⅲ朝鮮寺—在日韓国・朝鮮人の巫俗と信仰—1 朝鮮寺と巫俗」『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』（宗教社会学の会編）、創元社。
崔吉城、1994、『恨の人類学』真鍋祐子訳、平河出版社。
原尻英樹、1989、『在日朝鮮人の生活世界』、弘文堂。
宮下良子、2000、「シャーマニズムを媒介とした在日コリアンのアイデンティティ形成に関する一考察」、平成10年度トヨタ財団研究助成報告書。
柳東植、1984、「韓国のシャーマニズム—仏教・儒教・道教との交渉をふまえて—」『日本のシャーマニズムとその周辺』（加藤九祚編）、日本放送出版協会。
依田千百子他、1986、『朝鮮を知る事典』、平凡社。

Forming Her Identity of a first Generation Korean Woman in Japan: A Case Study of Shamanism

Ryoko MIYASHITA

In this thesis, the case of Ms. K is studied. Ms. K has been giving “kut” (shamanic ceremony) to Japanese people since around 1970. From the fact that her clients are Japanese, it can be proved that new shamanism is functioning regardless of ethnicity. There is a tendency that the first generation Korean women who have the base of their native culture are considered to have reproduced their ethnic identity, but Ms. K has been building up her world of life while she was sharing both Korean and Japanese culture with Japanese people through the medium of shamanism. The Korean and the Japanese have shared each of their cultures and created whole new shamanism, crossing the boundaries of ethnicity in the world of their daily lives, in spite of Japanese policy toward Korean Japanese which has undergone several changes: from forced assimilation into Japanese culture before World War II and discrimination (contempt) during postwar years, to integration into one united nation. Whereas the third and fourth generation Korean Japanese, who have their immigrant culture derived and developed from the original Korean culture, or their own culture which is different from their original culture, associate with Japanese people through their segment of “Japanese identity”, this first generation Korean Japanese shaman has built up her world of life, sharing each of Korean and Japanese culture with Japanese people.

In the preceding studies in the past, more emphasis was laid on the function of a shaman, who has the base of urban ethnic groups, to revitalize their ethnicity. But such assertion is valid under the self-evidence that Korean Japanese shamanism belongs only to Korean Japanese. If you emphasize reproduction of ethnic identity, you might put too much “emphasis” on boundaries, and therefore, Korean people in Japan might be represented as a too much peculiar ethnic group.

As is shown in the case study in this thesis, both the Japanese and the Korean Japanese are cooperating in newly building up what transcends their ethnic identity, by practicing their folk customs under the multicultural circumstances in the world of Korean Japanese. The purpose of this thesis is to consider how the first generation Korean woman in Japan formed her identity in the process.